

首都高速会社

舗装傷めない発炎筒開発へ

国際化工、NIPPPOと共同研究

首都高速道路会社は、
工事で道路に規制帯を設ける時に用いる発炎筒について、舗装を傷めないようにつくるための新たな技術の開発に乗りだした。発炎筒メーカーの国

際化工(東京都千代田区、長谷川文雄社長、NIPPPOと共同で、1年かけて実用化を目指す。発炎筒の側面をゲル材を内包した袋などでカバーすることにより、15分間燃焼

し続けても舗装体に熱が伝わりにくくする。首都高の工事で標準的に使われることを視野に入れ、評価方法を含めた技術の確立を目指す考えだ。同社は8月末、国際化

工、NIPPPOと共同研究の契約を締結した。発炎筒は、道路上で工事を行う際、車線規制帯を設置する数百メートルから一定間隔で置き、ドラ

イバーに注意を促す。ただ、高温の燃えかす

が路面に付着すると、カラー舗装などが損傷することがあり、対策が課題になっていた。特に線形が急な首都高では、カーブの手前に発炎筒が繰り返して置かれ、そうした個所の損傷が多いという。共同研究では、国際化工とNIPPPOが共同開発したゲル材の効果で熱を伝わりにくくする手法を取り入れ、燃焼時間が15分と比較的長いタイプの発炎筒でも道路に影響

がないようにする。そのために必要な評価方法を検討した上で、何タイプの試作品を作り、室内実験で効果を検証する。

首都高速会社では、発炎筒を一定量保管し、路上での工事やメンテナンス作業で規制帯を設ける時に支給材として工事業者などに提供している。共同研究では、舗装に損傷を与えない新しいタイプの発炎筒の技術を活用し、実際の工事で活用されるよう、標準化を視野に入れた取り組みを展開していく。